

9月4日(土) ポスターセッション(0号館7階ラウンジ) 掲 示 10:00~17:30
発表者説明 12:30~13:30

認知スタイル、学習者性向、動機づけ、学習方略に基づく
学習者要因測定尺度の開発

A Study of the Measurement of Learner Factors: Cognitive Style, Learner Preferences,
Motivation, and Learner Strategies

上田倫史、大和田和治、大矢政徳、筒井英一郎、小太刀浩太
教育学部、早稲田大学

早稲田大学では、現在全学的な英語教育プログラムとしてチュートリアル・イングリッシュを展開している。これはチューター一人に対して学生4人という少人数授業である。少人数の授業においては学習者のもつ学習者方略、学習者性向、学習者の動機づけ等が、英語学習達成の成功における重要な鍵となるように思われる。また、それぞれの学生の持つこれらの学習者要因を把握することは、授業をする側にとって、クラスの編成、学生に対する学習プログラムの提供において極めて重要である。

本研究では既存の学習者要因に関する尺度 SILL (Oxford 1990)、Yukina (2003)、Ely (1986)を基に、新たに学習者要因(学習方略、学習者性向、動機づけなど)に関する新たな尺度の開発とその結果について報告をする。また、Skehan(1998)の提唱する Conformists, Convergents, Concrete Learners, Communicative Learners の分類を実験的に吟味しながら、visual vs verbal, concrete vs abstract, analytic vs wholisti, passive vs active などの従来提唱されてきた次元がどのように関係していくかを考察する。その結果を踏まえた、語学学習における適性を測る尺度の開発可能性についても報告する。

また、大学英語教育の目標としてのアカデミックライティング、アカデミックリーディング、プレゼンテーション、ディスカッション、ネゴシエーション等の位置づけを示すとともに、新たな、教育のモデルを提示する予定である。

参考文献

- Ely, C. M. (1986) An analysis of discomfort, risk-taking, sociability, and motivation in the L2 classroom. *Language Learning*, 36, 1-25
- Oxford, R (1990) *Language Learning Strategies: What Every Teacher Should Know*: Newbury House
- Skehan, P (1998) *A Cognitive Approach to Language Learning*: Oxford University Press
- Yukina K (2003) Exploring Relationships between English Proficiency and Individual Factors during Junior High School Years in Japan. Doctorial Dissertation, Graduate School of Education, Waseda University.